

年間第二十九主日

2011.10.16

マタイ 22・15-21

今日は年間第二十九主日です。季節めぐりとともに、今年の典礼暦も残り少なくなってきました。年間主日のミサの度ごとに、今年はマタイ福音書に語られているイエスの足跡に従って、福音のみことばに耳を傾けてきました。そのイエスの足跡をたどる今年の年間主日ごとの福音は、秋の深まりとともに、イエスのエルサレムにける最後の日々のみことばに私たちを導き入れています。

エルサレムを目指して進み行かれたイエスの足跡が、そこで、どのような結末を迎えたかを私たちは知っています。イエスのエルサレムでの最後の日々は、結局は、イエスの十字架の死をもって、その幕を下ろされることになるのです。けれども、そのような破局に向って進み行かれたイエスの道は、十字架の死によって断たれたのではないことも私たちは知っています。

私たちがカトリック信者として招き入れられた教会の信仰は、イエスの復活に基づいています。私たちがミサの度ごとに福音書の朗読を通して耳を傾けるイエスのみことばは、「わたしは世の終わりまで、あなたがたとともに。」と約束された復活の主である、イエス・キリストのみことばです。私たちが信じる復活の主イエス・キリストは、福音書に記されたご自分の生涯の各場面でそれぞれの時に、それぞれの人々にむけて語られたみことばを私たちに思い起こさせ、ミサに集う私たちに向けて、その都度、新たに語りかけられるのです。そのようにして、私たちは福音書の中に記されているイエスのみことばを、今日私たちにに向けて語りかける、主イエスのみことばとして聴くのです。イエスのみことばを聴くとは、カトリック信者である私たちにとって、そのようなことです。ミサの中の福音朗読を通して響くイエスのみことばを、今日私たちにに向けて語り続けておられる、私たちとともにいてくださる復活の主イエス・キリストのみことばとして聴くために、私たちはミサに集っているのです。

この数週間の主日のミサで、私たちは、イエスがその地上のご生涯の最後の日に、エルサレムの都で当時のユダヤの指導者たちに向けて語られた、一連のたとえ話に耳を傾けました。それらのたとえ話をもってイエスが意図していたことは、イエスとイエスのメッセージを受け入れようとせず、ついにはイエスを十字架の死に追いやってしまった当時のユダヤの指導者たちに対する、身を賭しての抗議のことばであり、同時に、そのような状況の中でも、彼らの回心を願うイエスの最終的な招きでもあったのです。けれども、そのようなイエ

スの招きのことばが切迫の度合いを増せば増すほど、ユダヤの指導者たちは心を固く閉じ、かえって、イエスへの憎悪を燃やし、何とかしてイエスを抹殺しようとして、結束して陰謀をめぐらしたのです。この時点では、イエスに期待をかけているイエスの信奉者が大勢いることを、彼らも無視することが出来なかったからです。

今日の福音の場面は、イエスこそ自分たちが期待しているメシアではないかと信じ始めている人々の心をイエスから離反させようと、イエスに敵意を抱くユダヤの指導者たちが考え出した、底意地の悪い質問と、それにお答えになったイエスのおことばを伝えています。「皇帝に税金を納めることは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」という問いは、今の私たちにはピンと来ないかもしれませんが。けれども、このような質問をイエスに浴びせたユダヤの指導者たちは、イエスにつき従って来た民衆の心のうちを冷静に見て取っているのです。イエスのエルサレム入城の際に、大きな歓呼をもってイエスを迎え入れた人々は、イエスが今やそこで決定的なメシアとしての力を示して、自分たちを異邦人であるローマの支配から解放し、ダビデの時代のような反映を回復してくれることを期待していたのです。そのようなことが、いつか、神が遣わされるメシアによって自分たちにもたらされることを、ユダヤの一般の人々は、旧約の預言者たちのことばを支えに、期待し続けていたのです。そのような、いわゆるユダヤの一般民衆にとって、ローマへの税金の問題は、最も自分たちの生活に直結した問題であったのです。人々がイエスに期待しているのは、イエスがそのような人々の期待に応じて、メシアとしての力をもって、ローマの支配を打ち破ってくれることであることを、ユダヤの指導者たちは知っていたのです。ユダヤの一般民衆の中に広がっているメシア待望に、心のうちのどこかで共感しながらも、エルサレムのユダヤの指導者たちは、その政治感覚をもって、そのようなことは起こり得ないと判断していたのです。むしろ、彼らは、今や自分たちの目の前に立ち現れたイエスというこの人物によって、ユダヤの一般民衆のうちに潜在的に大きな力を秘めているメシア待望が暴発して、その結果、ローマの圧倒的な軍事的介入が自分たちに迫ることを恐れていたのです。イエスの時代の神殿を中心にしたユダヤの指導者たちは、圧倒的な軍事力を背景にしたローマの支配の下で、苦渋に満ちた政治的、外交的取引をもって、ユダヤの宗教的指導者としての自分たちの地位をローマに認めさせ、そのことによって、旧約以来のユダヤの信仰の伝統を守り抜いているとの自負を持っていたのです。

このようなことを長々と述べたのは、何故イエスがこの人々によって、十字架の死に引き渡されることになったかという経緯を出来るだけ生々しく理解し

ようと思うからです。

私たちが救い主と信じているイエスは、私たちの時代にも通じる、私たちの人間社会のさまざまな人々の思惑の中に生きられ、そのような社会をリードしていると思われている人々の思惑によって、十字架に架けられて、そのいのちを奪われたのです。

私たちが今日の福音で聞いた「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」というイエスのみことばは、イエスが生きられたそのような場においてイエスが発せられてみことばです。そして、それは、そのような私たちが生きている人間社会のさまざまな人々の思惑の中で、十字架に掛かれて死に、しかし、その一切を超えて復活されたイエスのみことばです。

私たちはイエスを信じる者たちとして、イエスが生きられた社会と本質的には異なる所のない、人間の思惑が交錯して止まない人間が作り出した社会の中に生きています。そのような私たちにイエスの今日のみことばはどのように響いているのでしょうか。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」このイエスのみことばが、このような社会の中に生きる私たちに、何を訴えかけようとしているのか、そのことを思い巡らしながら、私なりのその回答をイエスに願い求めながら、今日のミサをともにささげたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高